

911.3

シ

中

諸 部

七部集大鏡

中

猿蓑

ひ左古

續猿蓑

猿蓑

信濃仰九撰釋

俳諧の集はるる古今ふりて
愚考輯文曰人不通古今馬牛而如操居
をいふと百人一首を並べりあもその思振
りの巻改を食るる猿の巻を天智帝を
格別の伏りよりなり巻軸を慶帝を
うら住の山製るる二女帝よりて夜
るり宴ふ衣食住の三つを人といふ上
るるき大切のものをあまたいふこれに
して信陽合休一夜食住の三つをいふ

五

ハ意の歌るる猿ふ人九を和歌の要うて
人屋の大事人信内美次ふを花を月
雪の地輪毫又我邦の大事るる猿ふ和
歌の二重とするる素人るる猿ふ子
沃もあの一重とするる素人るる猿ふ
ふ及ふ所を忘るる猿俳諧の集はるる
むとあり族此境第一味するる猿
その古今ありて信濃の書るる猿
今ふりて解く猿といふ猿ふやふ
古一を解く猿といふ猿ふやふ
初の巻標もいふ猿又ふて大切るる
部ふ五巻の尺法ふるる猿ふ
はるの猿ふて起一き時るる猿ふ

いふ云猿の集の序晋子々をうゝて
字をうゝ猿の撰なり此又の書せり人々
人し何とてんあや愚考ををめ
翁の自筆と被小白雲竹を学ひあ
てを学うとてうゝるなり

初巻より猿も小叢を不しうゝ

古注より曰定家卿 篠とめて背よりけり
ひひひえなり一の不しうゝとて此歌を
上人権居士歌鳥欄子といふ日のを
て小弓を射るなりなりなりを町家の男
をををすねひて小弓張をえりよなり
なり翁ををををを猿人々似といふ
るなりは小叢ををを なるなりと物を
らるなり

何とてやと何とてや夜の猿の

一書より小叢の白をを集の父よりて此
白をぬるなり次ししの白を産出するなり
何とてきけと心とめや猿の群を姑
蘇城ののりやとせたりて三井の猿と
きいてるなり

何とてやと何とてや夜の猿の

一書よりいそる清水より魚より一巻
知とて古人の云湖多ふりたりておし
変人々なるなりけりぬる湖田れ橋

愚考金葉集変人々ひえ山おる一巻の
あてなるなりいそる湖田れを橋の歌を
流形より一巻のけりぬると初ひとて
悦とてなり是余の橋よりうゝるの悦と

芝山曰五雜俎曰百草不畏雪而畏霜
蓋雪生於雲陽位也霜生於露陰
位也

禪者の松の落葉や神无月

愚考神无月を依留するなり
十月と書きてカニナフキ西京雜記曰十月
旅卦爲坤恐人疑其無陽故特詔之
陽月所以見陽氣已萌也又本朝諸
神出雲の大社に集るゆへに神送多那
延社の爲ちなりといふ

至古のありける中の松よ十月

冬節曰夫木集夜等至右大に貯のあり
枝の萩をとりてあつて何ふのあり
そふきゆく

沢村をめぐめて通る十夜なる

愚考十夜を傳つて云伊勢なる貞國と
いふもの美濃をめぐりてを感へて
如堂よりして始て新しき宗を式りて
十月六日より十五日までをいふ又依ふ十
五日を急仏丸めといふ

茶の花やふふいふ人なき美濃女

成美曰傳灯錄曰吳照常製竹瀝羅
賣以供朝夕麗居士將入滅使吳照遽報
曰日餘居士出戸觀次吳照登父座合掌座
亡
愚考麗居士洛陽曰居士將入滅謂
吳照曰視日早晚及午以報吳照遽報已
中矣而有餘也居士出戸觀次吳照即
登父座合掌坐亡居士笑曰我女鋒捷

之て葉の花也一ふをくらまらるるやと
あり家よりとくりの別をあらをさ
る

あのをそと牡丹の花のまゝ 裸

愚考四機法はよき牡丹の詩款色却
因て露條英華不畏雪霜欺

暇日をもとゆくうそ子い

愚考雜五行書曰十月亥日食候令人無病
又亥八十二月小子をさすりのるまは女多
く福ふと云く又大成經より曰亥月陽亥天
照太神幸魂太神氣神氣神氣神氣神氣
安懷已降初地安以五色解并五色
幣及月辛酒五味菓等穢穢棄之國
災皆消國後悉安と云く類聚國史曰

同化帝十月但刻より祀て保を献す
婿の亥よりハ十一月よりふるりり
の候といふを經向よりて暇日をもと
くとり暇の字よりわらわ

神運水にまのるの夜

愚考杜荀鶴の白は秋夜
過山といふるをりてはる山より
かゝるる必定なり禁秘抄曰件夜太
有無物也或六角或八角云く一書ふ水
口兼源寺の僧雲月影自神運よ運坂の
回と出るといふるを非り人より
暇よりなりなりなりなりなりなり
一書ふ此白雲月影自と相書なり
春夜秋より月影自なりなりなり

水月の水を掬ふや仙苑
昔言曰六月土用中水仙の根を洗ひ
しして植む時を花摘別よとや
と云く一説よ土用中より月よりして
植むをよとすといふ

尾形の内より海をさへ海氣の如
五味堂曰海氣の口をさるべきものなり
を天祖女神令其口をさくといふ
愚考尾形の心もさるべき垣内と云ふと
さるべき何家を海の氣と云くゆふ小氣
をさる眼よりして一説と云ふなり
るんといふ多賀の寺居の事なり
愚考多賀の寺を舊事記曰決列多賀より
出現する亦伊特諾尊迹に 邪八因体

うして月よりとすなり中仙居の通り
智上人たる石の寺なり

住はるぬ旅の心や蓋火 燈

紫豊曰夫木集心二燈傳燈
うりてしてありき 旅の心とすなり
きこひのよりありき 火燈とすなり
の五文字なりとすなり

門前の小家ありき
愚考易言白雷在地中復先王以是告國
國商旅不行后不省方云云は日身を安
し骸を静ふす又百友万事を強て
改て生れ是を五経通義 白虎通云の
畧なり又手中行事云云を至る
一陽成後して陽成初て至るとき

るまは、方々を動さん。て微陽を養ふ
一、又奴婢するも、あすするもの、又近思
録曰、冬至、祭始、祖、冬至、陽之始也。始、祖
厥初、生民之祖也。冬至、を、祭、大、切
の日、冬至、ハ、唐、古、りて、る、元、日、より、きく
祀、ふ、とい、り、これ、ハ、日本、の、り、る、に、ハ、小
家、も、祭、ふ、と、る、儀、ある、と、又、江、家、次、才
入、曰、冬至、の、祭、云、る、を、祭、年、帝、神、皇、二
年、十月、己、丑、天皇、太、安、殿、入、出、御、あり
て、冬至、の、賀、辭、を受、とい、ふ、と、て、又、聖、皇
を、至、る、柿、の、り、る、と、桓、武、天皇、三年、
十一月、朔、日、始、て、祀、ひ、り、と、り、る、元、年、田
祖、を、免、さ、り、と、冬至、ハ、その、祭、を、さ、り、る、を、
又、漢、和、天皇、貞、觀、二年、因、十月、を、小、る、を、

大、入、り、と、め、十一月、朔、日、入、冬至、を、操、出、し
て、祀、ひ、り、と、り、る、儀、亦、施、の、白、の、詞、書、に
雲、月、朔、旦、て、冬至、ハ、冬至、入、り、と、り、る、
阿、の、儀、用、の、旦、の、と、り、る、儀、亦、り、と、り、る、
矣、因、此、祭、や、浦、の、り、と、り、る、儀、亦、り、と、り、る、
一、書、ハ、矣、因、の、祭、や、我、前、數、祭、の、浦、に、き、と、
る、と、り、る、儀、入、り、て、祀、ひ、り、と、り、る、儀、亦、り、と、り、る、
成、美、曰、余、吾、の、海、を、近、に、伊、余、の、海、水、の、
は、き、と、り、一、里、は、り、と、り、入、り、と、り、る、
あ、の、や、り、と、り、る、と、り、と、り、と、り、
此、本、戸、や、漢、の、と、り、と、り、と、り、
去、其、所、ハ、曰、冬至、の、月、雲、の、月、並、に、ひ、り、
より、先、師、の、祭、の、日、入、り、と、り、と、り、
柴、戸、と、り、と、り、と、り、出、板、の、後、大、津、より、先、師、

のふふ葉の戸よりけりけり此本中なるなり
不考逸る一白も大切なり後金出版
よやうふふも改一きよりなり 漢物曰
手家物語より福永の初より徳大寺大
将実定野田初の日えむとてよりより
て惣門をきくをよりよりよりより
等よりよりよりよりよりよりよりより
るよりよりよりよりよりよりよりより
るのほのよりよりよりよりよりより
のよりよりよりよりよりよりよりより
よりよりよりよりよりよりよりより
大切なりよりよりよりよりよりより
初金せりよりより高蟾の詩より重門深鎖
禁鐘後月漏 羅山宮樹秋の傍よりより

静 云々を数珠もむくひ細代也

愚考資為付物記より曰 珠数の負一百
八者表百八煩惱磨轉之別 成百八者仏
煩惱尽き解脱也又 許悲曼陀羅咒
經曰梵僧よりより針塞莫と云又經略
云 提子後十倍蓮子後百倍水精後
子億倍量提子後無量也又大論曰六
根各具六根六で三十六根也是配過去
現在未來三世合百八煩惱也

勝 突よりよりよりよりより

成美曰勝著る小すききの縁はよりより物
より又并る名同敷聚抄より云 載る八
角の蓮より縁をきくよりよりより云々

雲らりや梅屋の芒の前残り

と云ふ強き事なりその礼なり家いふ事相違ひ
の事なりのを乞はせりとるなり

今更にゆく年のまうけやいせ然也

愚考いせふものる年等の国志法固より
系諸する事多き事ハうくいふ事伊勢
を垂仁天皇十六年丁巳九月^{十月}甲子渡
余郡宇治五十流川上より迂一なり
元内宮と称する事多村上天皇御宇
祭主公等の時小皇太神ハ興る事あり
ゆへに内宮と号す外宮と号す外宮あり
ゆへに内宮と号す外宮と号す外宮あり
二年戊午秋七月七日丹波國余佐郡志
井系より今の山田の系より迂一なる内宮
より曰百八十四年後なりと云ふ又然也

今日本紀曰神武天皇五十八年紀國小
出現伊弉冉冊尊之本云々云々祭神五皇六
十五年建立新宮を景行天皇五十八
年建立之然也又文政三年二月二十五年
なり法林の年月異同ありて區々なり
世々を撰ぶる事いふむけよむけ

一書ハ於政をより一書云々新なる事
不々々々寸約いふおけて云々云々
愚考世々を撰ぶる事東西より刻むけよ
と云ふ異列一ト向の時より北をより
初その事なる事ハ東西より刻むけよ
を撰と云南北を撰と云東西の撰
南北より四十歩云々
云々云々云々

愚考王維の詩云官場榮酒客山
本女郎祠別後因明月君應聽子規の
詩此歌老、此歌も国秀の事なるをハ
一入して、此歌は女要刻を新古今
集ふ歌實に貞享の頃の名妓として神
元張の六歌仙といふ事、此歌一入する
不問要刻唐土和歌大橋小文主 吉野
松島一見の時子なる、この歌
の毛衣ともありける、

松島や 松島や、この歌は吉野
松亭曰、松島曰、松島法師、松島法師
といふ歌、松島法師、松島法師、松島法師
といふ歌、松島法師、松島法師、松島法師
といふ歌、松島法師、松島法師、松島法師

何れ但し古法に依て、此歌は、
松島法師、松島法師、松島法師、
松島法師、松島法師、松島法師、
松島法師、松島法師、松島法師、
松島法師、松島法師、松島法師、
松島法師、松島法師、松島法師、
松島法師、松島法師、松島法師、
松島法師、松島法師、松島法師、

愚考、慈母の子、家礼、慈母、
子無母而父命、他妾之無子者、慈已也
同親母、義服、齊衰三年、又名、慈、小曰
嫡母、繼母、慈母、養母、庶母、乳母、合曰六
母、又能子他樂心、名曰慈、家礼、曰是

鳴し小呼つきしなりとあり

増量やんちきと美を云の月
元記曰増をえらむとて増量といふ
を海屋よせり一は増の性よりく
りのよりてその量中入て量を引き
たりとて賦と名りものなりとてや
愚考拾遺集よ云の夜を浦島子
の装るもとやとつれくはてくや
らむ又監令婦よりそねりてわら
と云の夜のえとてぬきそはるなり
なり

君り代や飛广 系と端いと

太節曰通に玉坂田飛广の社よ四月
勢よ神事なり昔年を此系の日女

る多り男の数なりと端を改ふいと
被てわたりなりとて拾遺集れり
通にあり飛广の系なりとてを
るき人の端の数なりと

終ゆきとてふとて額髪

系子紙よ曰終髪撰の時去来り許一
云わたりありとて終髪の一集よ
なりとてそのとて書にたりとあり
愚考源氏帚木の巻よ君の心なる
とてなりなりとてのなりとてなり
りつよみたりとて額髪とてなり
とて心なりとてなりとて終髪
の巻よなりとてなりとて終髪
を引けたりとてなりとてなり

見えたり。樹。漢なり。樹。と。詠。も。并。出。の
里。を。せ。たり。漢。家。本。歌。詠。墓。の。吟。詠。皆
田。苑。水。津。なり。彼。一。日。多。く。集。の。歌。を。山。中。の
田。の。腐。香。火。屋。々。下。り。城。壁。の。下。を。お。叶。入
る。なり。歌。詠。と。り。入。り。夜。煙。の。間。隙。入
得。一。ち。り。於。此。山。腰。入。り。め。ふ。ふ。ふ。ふ。不。足。は
より。て。心。彼。歌。入。り。お。り。ふ。ふ。の。あり。志。意
の人。垂。養。毒。野。の。素。を。發。守。一。く。氏。を。こ
烟。を。發。一。く。守。る。こと。を。こ。家。不。後。成
卿。と。歌。詠。何。國。梨。と。を。國。の。見。事。なり
近。諸。院。の。於。右。京。大。建。歌。神。卿。の。於。子。入
して。後。成。卿。も。初。め。歌。詠。と。す。なり。歌。の
一字。より。て。め。たり。こ。後。後。成。と。め。く。め。ふ。ふ
と。云。こ。う。き。周。隊。の。中。なり。と。り。と。も。私

を。發。て。雅。一。く。入。る。の。公。を。大。切。う。い。ふ
を。彼。の。新。名。目。を。述。ハ。止。る。を。は。る。の。後
諸。と。見。け。例。の。独。古。漢。首。と。い。ふ。ま。う。い。ふ。家
歌。詠。の。云。次。を。く。一。て。因。は。り。一。一。を。仇
例。なり。の。信。あり。ま。は。り。一。一。を。述。を。八
を。述。一。一。歌。詠。の。後。と。一。て。出。せ。一。一。ゆ。え。く
の。愚。人。の。迷。ひ。一。一。を。ふ。と。一。一。く。書。を。信
す。り。の。愚。なり。なり。又。ま。ま。集。入。公。實。朝。臣
す。ふ。ふ。を。の。り。一。一。つ。り。ふ。ふ。一。一。信。々
一。一。い。や。の。下。も。水。一。一。の。なり。と。述。ハ。垂。何。入
ふ。ふ。と。あり。例。なり。ま。は。り。此。を。故。火。屋。を。の
る。の。り。なり。一。一。信。後。年。わ。る。云。詠。の。上
より。て。心。す。を。信。あり。ま。は。り。と。り。と。い。ふ。こ
更。玉。割。ら。り

此境にふいふやうなやうな
と云ふのであるや

糸子子ふらひやうの云書るは漢氏漢の
巻のうちをばみづるのなり蔓延と書
句會曰連續之見也と云く一書小莊子
又曰有所謂蝸者君知之乎有國於蝸
之左角者曰觸氏有國於蝸之右角者
曰蠻氏時相与爭地而戰伏尸數萬
逐北旬有五而後反

五月る小家より控へてある

師尹曰説ふる曰附螺脊負殼者曰蝸
牛無殼曰蛞蝓本草よる陵螺と書
る則爾雅よるはつと河す

一る士の慣次あるの五月

弁地曰えあるをあるとて付や有て
ふれ一字よりととてあるとてあると
らハ此語をあるとてあると

五月のめうりる

愚考五月のめうりるの事跡をその目小出
より窺はるる形に無別等とて此の字

を疑ひるる五月のめうりるの事跡をその目小出
より窺はるる形に無別等とて此の字

五月のめうりるの事跡をその目小出
より窺はるる形に無別等とて此の字

五月のめうりるの事跡をその目小出
より窺はるる形に無別等とて此の字

五月のめうりるの事跡をその目小出
より窺はるる形に無別等とて此の字

五月のめうりるの事跡をその目小出
より窺はるる形に無別等とて此の字

五月のめうりるの事跡をその目小出
より窺はるる形に無別等とて此の字

五月のめうりるの事跡をその目小出
より窺はるる形に無別等とて此の字

代りり是も 錢なり 二字ともふ一毫こ

目の名や 葵うきく 五月雨

一書ふ五月雨のもまきやうもあきくはる元の日
歌もさるは ねんはるのさきふあひの
のうきくきくうきくをえん出して日のたを
糸一うきくうきく せうふ葵といふを向
日葵一花文菊又日まうりとりへりれ
葵を日ふ向といふるるまきんなり
傳曰葵能衛其足 成美曰うきくあひ
をとりわきてみえねとも日の歌ふまき
こひてうきくくくらむさう一て 子春の心
うきくわきん 愚考亦雅曰葵老揆
也葵葉傾日不使照其根乃智以揆之
はる年ふふふたのうきくやま島

太師曰嵯峨日記ふ北月既 嵯峨のまうり

見むと相ね厄あふ 去来途中の吟とそ

うきく不審なり 游力ふゆはるやいさや

ゆき流のけや 葵の田極うき

一書ふ猿樂能大吏家ふゆ流といふ流

力の十八番をさるあり 國一狂云ふ田

極歌とりふもの別ふあり 是らありを

せうふきく流のけや けのけのけのけのけの

けのけのけのけのけのけのけのけの

けのけのけのけのけのけのけのけの

けのけのけのけのけのけのけのけの

けのけのけのけのけのけのけのけの

けのけのけのけのけのけのけのけの

唐よりそのるをそのるとして通曉する
やうにそのるをそのるに書けるなり
一書より云々
の田植歌を昔生仏と云盲法師の傳りて
人より云々一書より云々愚考愚考の云後を
相院の傳り信濃春日新書入る手家ありの
つくりを傳りて生仏といふ盲目より云々
てりて世より新書を吹徳院の傳りて
後系宗親の兄よりて清才ありて寛永に
歌山より傳り時代いふ有るを注の是非を
とるなり

眉拂を面敷よりしておの花

一書より眉をそのるをそのるに書けるなり
一書より云々
の顔具よりて大女帝小女帝なりといふ

此花の形より似るものよりてその面敷
よりてそのるをそのるに書けるなり
一書より云々
物よりてそのるをそのるに書けるなり
大國よりそのるをそのるに書けるなり

法隆寺因帳南々伝の太子

佛傳の傳りてそのるをそのるに書けるなり

愚考推古を皇十五年龍田明神の教より
よりて聖徳太子の草創より太子二歳
の時二月十五日東方より出くひて東に伝
て唱へる人よりそのるをそのるに書けるなり
一書より云々
毎日午刻七ツ鐘よりおれをいふ
よりて紫式部南々伝の舍利をいふ
七ツ鐘よりそのるをそのるに書けるなり
紙より云々大和の法隆寺より因帳あり

そのひた子の冠を見落し、飾りごとを後
の因幡よもいでに越えあへる人、うゑふ古代
のうゑふ心をうゑふまゝに、呼の心のわとに
ゆひやうへー

源氏や毒づりさきにゆりの花
愚考百衲をゆりてふ草をまはす
とまはすの花よりこころす

ふやうのむすの子の母も泣く

成美曰万々ふみ山上臆良おくら等々今
をすううむろろむとこの母我を万
はらむのぞふよれりこ

みゝ夜を衣次う冠考ふ名残す

愚考二條院の以金賣吉次末春とり
りのちの異列より京邸へ毎年上り
るを世人の志る所あり

下圖や地味なるの坪のちえ

愚者之悔復曰地蟲化腋踵折脊出而爲
蟬さのちの意をく一圍を造ハ濕氣なりて
蟬もさるるなりたそくくらのすくくそを
出すといふ意なる

みづのきりぎりすの歌の歌

一書の所由を問ふに、
「我々夜すゝいねて、
せしむるは、

日の星や
くまの星
牛の舌

漁村なる山城國宇治郡桑と大津の弓一里塚
の西の筋あり

走何むこの藪くはを暑く

愚考竹久六十年よりて花咲実を結ふ

を竹則栂のとありせむをそまよふあら
て言さ二三字人を恨りて最まする中あり
誰んをまよふめく石原細畔をよみあらわ
りあり決して大木の十年栂をそまよふ

夕ふま和岬並のふりふの雲

愚考岬を禿山之雲の雲の言く低く
まよひを元山の秋ふえりて言く

終夜林ゆきや裏れや

一書ふか賀の全昌寺を大層ちの城介に
有様あり有り芳良を前夜翁ふ別道
ては寺ふ家一てり吟く翌日翁ふ歩の
寺ふ止家ありてあり

五月や六月も出の夜ふ六似り

愚考咲囊抄曰詩又事を依りて夜庭ふ

晒すけふ五月といふ古今俳諧歌六日の
夜の歌よていけく心とまよひ心をまよ
ふ所もて所々の川原を今やわてて世
祖翁ををををの吟有り近頃の言
目の出ふよりありてその川をををを
まよひて此境ををををををををを
る

合歌の本の葉然もいふ星の歌

一書ふ曰新後拾遺集ふ云七々の意も
うらふもいふて一夜のうらふもいふ
らむ合歌を所ふも所ふも所ふも
あふて眠ふもあふて眠ふもあふて
の本もいふていふていふていふて
まよひていふていふていふていふて

新秋曰彼道交窓依合欵安ふたいてその
まふあーといふ一とあり 愚考 梧物記ふ

曰合欵一名 夜合 和心 志 念 又欵 木安
ふたいてそのまふあーといふ一とあり

まをうけておらてまひま 櫛子
愚考 源氏夕歌の巻ふ 咲花ふつ

てふまをうけておらてまひま 櫛子
の櫛子か 安ふんをうむとまをうけておらて

おらてふまをうけておらてまひま 櫛子
おらてふまをうけておらてまひま 櫛子

をうけておらてまひま 櫛子
迷ひ子の親のあつらや 芒をう

愚考 急補ふの親の心をやみふあつら
とも子をぬりふたふあつらいぬらう

果ふあつらい芒をうけふあつらいぬらう
うーあつらい芒をうけふあつらいぬらう

心ふあつらい芒をうけふあつらいぬらう
君のまふあつらい芒をうけふあつらいぬらう

愚考 月日と味を長味と目えとのあつら
郊七を去るあつらい芒をうけふあつらいぬらう

ふあつらい芒をうけふあつらいぬらう
新撰万葉ふ 秋日遊人雲 遠方道

遠方道 見 芦 芒 白花 揺動似 招袖
疑是 酈生 任氏 芳 又古今集ふ 秋の

秋の 孝の 枝の 花すき 櫛子 出てふ
招く 袖と 見ゆらふ

いふくふあつらい芒をうけふあつらいぬらう
いふくふあつらい芒をうけふあつらいぬらう

を任職と云ふ本山上人を隠居する
二世上人他阿まより代る他阿上人
号す一世上人気比の明神より泥濘を
あはれをて社所ふ砂をまゐるひき
代この例とす系譜の案を門の介を
木履をとるきう一持の持より一砂
石をとるきう持より一持より一砂
仲衰を皇行宮の通より一持より一砂
美をとるきう尚國の二宮より一持より一砂
二月事角鹿則興行宮而右之是謂
第飯宮

一書云但徠曰我子を甥のきう一持より一砂

を任職と云ふ本山上人を隠居する

愚考礼檀弓云我子の子を我子と云ふや

あやうきと云ふやあやうきと云ふや

成美曰和漢三才系云曰鱣^カ鯪^カ魚形色似

鮎而^カ洶其尾有小岐有^カ声如蛙鳴人

捕之哀声如曰五紀又似曰岐崔氏

食經鰻音客和名曰知^カ知^カ加布里以鰻

而有黑点也公石曰きうきう俗云峰奥

とり^カ鰻サツリ我信濃よりてきうきうと

り^カ此魚鰻に似て針ありきうきうに至て痛

中^カ積^カ股洪水の後更ふきうきうなり

そは後徳のせりるをわたりしとあり又
寛政の末よりききうへありしやといふ
僧正の妹の小玉れきありといふ
一書ふ云彼花山僧正のうけつゝそめ
のときよりわたりしやといふ小玉のききと
ききとあり

一戸や夜ややうう 約 述

愚考一戸を南極のくち盛恩より十五里
ふと下りし牧を花牧尾 設美野等
北の山を越へしふちのくち約述二十三日
といふ九二百里の行程なるまゝ夜ややうう
とあり

田舎間の序縁さう 葉の夜

愚考田舎間を五尺八寸五厘の厚さ一丈

六分京間を六尺三寸厚さ一丈七分三厘
門扉を六尺六寸厚さ一丈八分毫を高
野間とありし吉野とありし用ふとあり
禁中七尺厚さ二寸五厘の半あり

此のたしきとありしとあり 櫛のたしき

成美曰古今集きのうまきと早苗とありし
いはのうまきとありしとありしとありし

神田系

花すき大名をわたりし

愚考花すきは秋のうまきとありしとありし
とありしとありしとありしとありしとありし
とありしとありしとありしとありしとありし
とありしとありしとありしとありしとありし
成美曰神田系 神田系 神田系 神田系 神田系

人皇四十五代 聖武天皇 天平二年庚
午鎮坐延文年間有故合奈平將門
美云 愚考北系五代記曰能奈と云
るは神田の神と限るとるは本訛宣と云
我朝は能の始るるは地神五代天照神
の天の岩戸より入るは一時八百系神集り
て胡倉より一神奈神を奏し多し
以来こそよとて能武三番といふるは
是神太夫とて天照太神十歳曆を春日の
神三番申雅久と住吉の神とてより
我氏子といふは形を奈神禱をるすも
能の舞樂とて志方とてなりよるは毎年九月
十五日神子能ありと云く能りよ上牧家と

小奈家の合能とよとて大永四年神多能
おととより能を例して隔年の奈礼
ありて今よそのめ一系八幡と暮松と
いふ舞奈能能の老あり此人に戸ふ
よとて居住し三年より一度の神事能
を能とて今よとて今よとて今よとて
さして今よとて法候方より奈礼の能
固を仕るは行列を花芒といふるは
まきり林の文や能なるは
成美曰病源論曰風癰疹一名癰癰人皮
膚虚為風寒所折則起也和名加佐保
路と

塩魚の塩とてさうとて林の能

一書とてさうとてさうとてさうとて

梅咲て人の怒の悔もあり

芝山曰梅苑悟入師之果和忍辱心より

てよりなる怒の悔をたれり

一書ふ高岳より入人犬のめりとりつ子

詞を返て高岳を梅の名西と愚考

蘇子瞻の詩より上畧山人醉後鉄冠落

溪女笑時銀掬低我來觀政回風儒

皆云吠犬足生驚但恐此翁一旦捨此

去長使山人索莫溪女啼此溪女を

上篇より比喩して梅の多ふ所を云

一佐るよりいふは違ふなり奪胎

換骨の手法なり必ず定むる

成美曰碧巖云隔牆見角使知其牛

一書ふ八重梅の枝を雪ら梅の多し

あり梅の本意とすり変るは花より先

らして瘦てさうくいふは梅の花より

きよりきこぬよりよりよりよりより

くよりきこぬよりよりよりよりより

花のよりよりよりよりよりよりより

ありよりよりよりよりよりよりより

山子良子の一りといふよりよりより

一書ふ信ふれよりよりよりよりより

一書ふ信ふれよりよりよりよりより

子良物忌と称す社家二十八家ありて

その娘をとりて社家をとりて梅より

一書ふ梅の本希るまはゆりしとすを
ふゆれ梅を法淨潔白有り花をれ
梅をもてか婦貞女ふ比する詩歌
るるふよくありるあり 成美曰坂士仙
太神玄系詣の記ふ云子良とて知雅
のをとめのいすこ夫婦のわらふを
可也膳を梅ふふ急用ふて石仕を
神ふふふふふふふふふふふふふ
事るふ一眞監ふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふ

入相の梅ふふふふふふふふふ
成美曰暗香浮動月黃昏とる梅の
有影ありて林和靖の句ありき
ふふふふふふふふふふふふふ

才雅曰ひとりありふふふふふふ
ふふふ根根の梅の自ふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふ

百八のうねてふふふふふふふ
野秋曰百八の蓮の数を法行無常
滅法生滅滅已寂滅る樂法はふの文
をふふ夜ふふふふて一ふふ二十
種とふふ則百八煩惱を滅ふふふ
数あり 愚を思ふふふ百八のふふ
冠りふふふふふふふふふふふ
赤染の湯の家集ふふ蓮の侍をふ
ふふふ後のふふふふふてふふふ
ふふふふふふふふふふふふふ

独寐もよき寤とらむけつ子曰

愚考民家宜忌縁よ曰正月を独寐といふ月ありといふ縁よ必不祥を招ぐものありと云く止るを好まざるハ伏魔と床よ並てありありさるハそのう一初子目とあるはよき寤とらむと思つるうむ又五雜俎よ曰止月上ノ子甲子なるまハ豊年丙子なるまハ旱戌子なるまハ蝗虫庚子なるまハ叛壬子なるまハ水と云く時よき一末ぬ夜とるまハ臆と愚考空也の透身神鼓とて夢中五示の三昧場とて夜行す末ぬ夜とるま氣ふるまハおろろなり

うらやよりたのしい切曾猫の意

去来抄曰翁の曰心よ俗情ありものひとふいふ出けとりさるるうらやまは俗情是よりて本情をあらはさるる是より老小然人々名は方よ高く人のりてげやす白多し是よりまふいよりてさるめて本情をあらはさるる愚評猿蓑ハ祖翁の精撰ありて是より七部の因うらやま花実全うして序よまは自筆よ書ありて吟味をそり多のり集るるより愚評の白を入るより一き謂る去来抄の梅より是よりありは白本翁を定家卿のうらやまより世をまふのうらやまの猫の妻はふいふより春の夕に祖翁然人

成美曰に淡抄曰玄實傍於都を辞
すり時きつ國を山水きりしと云ふ
き君う都をすすふにやと云ふ是

氣とて夏の夜の事とて花朝

愚考乃親を和名抄よ由波 祚代卷曰
天照大神脊よ十箭の親五百箭の
親を肩と云く武用年略よ曰空穂を
矢を盛物なり空とりしものし穂を付
つり 佚囊抄よ曰楠正成に製すり字よ
宗と書片なりをををををを又つ不
の文字廿四通書方なりをををを略す
大考や吉野の契の花の果
愚考花も契なりとやは強書の心を
とてとてとてとてとてとてとてとて

乃灌や花をををををををををを

一書よ曰乃灌を太田持資入道源頼政
之裔文武の才士なり文昭十八年強倉小
て討死す年四十二やいりるをををを
愚考乃乃灌を判製の号なり和歌八集
亦三十六歌仙の一人なり世人なりと
探于よ夜なり花の立す

愚考乃宋書曰宋の武帝の女壽陽公主
人目含章簷下よ卧梅花公主の額の
上よ落つ五出の花を成すををを拂へ
とて去らん自從して梅花粧あり
源氏の娘をををををををををを
姿の摸写なりとて

いづれ蓮より手りせしもの
吸物より先出ずるものすいふ
一書ふ肥後必水善寺より水泉池清水
苔出ふより

比喩も盧同の男吾よりよて

一書ふ唐の詩人より榮紙を書し
人より盧仝の名よりりのよて榮人
の隠者として

隙をよりて車ひきふむ

古注より曰夕飯の宿の侍より成美曰
源氏夕飯の巻よりきこを並すより
侍りていとふむむよりわきよりやめ
なやめよりわく一手いへ侍るむわ
より

てかりありてしよりふよりひき入
てかりあり

此のちや蕎麦めすよりみ

風谷曰古今著聞集より云徳興僧於時
のころよりより飯の富よりはをより
侍るを或夜盗人の皆引てえより
とゆてよめり能く守人を長擧るや
あつらふもそんをとりのそより
よりそののの大盗人より擧密保輔と
りよりよりよりゆふより擧とより
あり

そよらの雲のちよりあきそ

一書ふ臨鞠のそよりを雲と見て夫
をあきと虚より依よりよりと云

一、不ゆりのも、此の道ハ是れ、所ハ近
う、此の道ハ、能國のさういふ、いふ、おやつ
う、所ハ、

ある、金と、う、ま、一、十、れ、さ、う、ま、

ふ、代、持、つ、ま、の、を、さ、か、し、子、日、で、

一、書、小、十、の、益、を、乎、生、の、潤、澤、を、ま、あ、ら
い、と、う、え、て、ふ、田、の、松、を、ふ、附、く、う、

海、行、家、集、ふ、代、持、つ、ま、の、を、さ、か、し、う、う、う、
に、め、つ、や、君、う、ま、の、お、み、と、り、を、さ、

愚、考、又、徳、実、録、曰、天、安、三、年、二、月、癸、中
有、曲、盡、預、之、者、不、過、公、卿、近、侍、數、十、人、

昔、考、上、之、申、必、有、此、事、時、謂、之、子、日、然、
也、松、と、い、ふ、け、て、二、百、よ、り、い、ち、さ、う、り、り、

定、ま、さ、し、一、さ、き、ま、り、の、文、

金、持、と、人、ふ、研、り、方、の、安、さ、

一、書、小、用、達、の、町、人、の、並、く、う、う、さ、き、派、利
り、て、結、持、持、り、の、腰、の、物、を、ま、う、ら、め、り、す、

その、付、き、り、り、め、一、世、る、より、り、り、名、を、金、持
し、と、名、を、ま、う、ら、め、り、一、書、小、法、度、の、

指、必、の、さ、う、り、只、今、實、誠、を、よ、り、と、使、な、し、
い、さ、う、り、の、こ、は、ま、ふ、入、の、持、り、て、金、持、と、名、

名、を、使、り、り、り、
何、を、見、り、り、り、何、ゆ、え、り、り、り、

花、と、ち、り、り、り、西、急、り、さ、り、り、り、
本、曾、の、歌、草、入、り、り、り、り、り、

一、書、小、西、急、り、法、然、上、人、の、身、子、の、罪、を、
刑、を、り、り、一、書、小、例、の、就、急、の、侍、に、中、ハ、

何、を、見、り、り、只、使、ゆ、え、り、り、り、り、り、り、

露のやうなるものなりきりものより心
よりえり西急と稱するなり次の白木等の
歌草より言えり所の傳るなり愚考はゆ
うりといふべきを記し多ひてはる歌の
歌草より西行上人を多し海院上北面文
武の達人俗名法といふ世路ををる道
安んを惜り保延三年八月家出して北山
西急のりといふて別髪阿ふ年二十と云
西急寺より行基の因基今を専念の僧ふ
まをもちり西急寺小立し時とめこり梅
さうりなり家常ふうとさる人を多しふ
より建前白をゆばうりといふを八月より
八月より白露のさるり花といふり身は二十
三西急よりさるりといふて西急の衣付

なりし西急の衣と云ふ西急のりなり
西急の寂をさるすり貝系木等路の記
曰大井太之等のる西急の墓あり西急
坂といふ歌草より一句の元会をよて来
常をいふむいめり梅振るり西急を
然然上人の弟子よりて物を傳ふの
るるものとす西急の名を世とふい
うかともありものなりといふるなり
注者の心いふる元来るなり西急の名書
藉ふありて西急のりなり七十八人あり歌
歌草のりなり成美曰个字集飲食の
蘿スリウキ歌草よりなり菜ふ海歌をく
て一て二十日なりとねり寸納豆のふり

半花仙の花をさし綴りすりの歌を撰む
 此の癖も又花を揚る一書なり一族を
 希代の歌多し多罪りしはありあり
 歌仙の花二つありし咲花をすりの歌
 咲花を百歌ふ一ヶ所あり又花を表
 するよりふ子細り二の表三の表名の
 表ふすりの歌を撰む次方なり初表ふ
 花とすなり一余幾なりを三書り
 此の一首のめより一書り占今ふ
 例ありし控りし民やその道を延年五白め
 七白めりし小花をすり族あり、右今来
 書者の法なり又歌仙小花三本出せ
 一より西花ふより一書り故あり一

花小歌よりふ心、此の如くは
 本見ゆりもろしきなり。そ不覚惚の至
 る月花を一夜の的射ふ花を愛せ
 大切のものゆへに名残の花小を香を
 をとるを事をす。忘るることも思案
 なさくして考ふ。竹小曰花の姿を
 よて連歌とは花伽藍をまねと強ひ
 す。一花以大切ありあるは一文字歌
 の意ありと橋の歌よて花ハす建とも
 花の歌よて橋をちぬ古今の法令と更玉
 刺祖孫の金玄の事として自己小伽
 藍を知りたりとわづらふもの。好む
 則花名の好む一なり。
 梅乃茶葉よりこの家のとりけ汁

一書小治の事所謂之辰切るなり梅小
葉の毛をとりて東海を吹返一口小
そのとくさる感嘆少なり云々

とくさる感嘆少なり云々

成美曰三才系云曰今云稷園子之歌
占者系多用黍稷今則以糯養又和名
抄案之度政系解之又字法指遺云云
愚考神名目於黍抄曰糯米を蒸
て鰯卵のめくおよせして斤本よ盛て神系
ふ候

稲の葉延のちりちりさき風

愚考新の白と萩の白とる五白の
白葉の白とるまきなる

内義政の白とるまきなる

古往皆曰西形の白とるまきなる
此の白又西形の白とるまきなる
てい又西形の白とるまきなる
りき世をよそふりて候ていふあり
ゆくまきなる

愚考此又体更

ふ心ゆりいーいー箱の白をさして我々の
めくまきいーいー今まきいーきの白の
旗授とあちちあちちいーていふ文
侍るり又世上の説ふる内義政とる
虚名るりいーいー候ていふとる
りよりいー人を定るる悪いーと云いふれ
はうく抄付の海なるすを待るり候

をさうめて高野の網女より入と云ふ
りものよりたのめて美の目ふき野吟
橋をよぎけりあるを思ふ——合せうを
ほしきふちの魚くふるむ

花のうしろの百衣の——あふ

成美曰 史本集曰 すまのうしろのうしろ
すう——小倉よりうしろのうしろのうしろ

所定よりうしろのうしろ

愚者の花のうしろのうしろのうしろ
又瀬戸内とけりうしろのうしろのうしろ
てか海とけりうしろのうしろのうしろ
千室りありうしろのうしろのうしろ
か海とけりうしろのうしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ

大膳よりうしろのうしろのうしろ

公衣曰 伊勢物語曰 陸奥の女をうしろ
ひ一夜りうしろのうしろのうしろ
女歌 花のうしろのうしろのうしろ
りけりうしろのうしろのうしろ

小刀のうしろのうしろのうしろ

成美曰 盛人そ歌合上のうしろのうしろ
うしろのうしろのうしろのうしろ
うしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ

一歌曰 うしろのうしろのうしろ
愚者小工面のうしろのうしろ
うしろのうしろのうしろのうしろ

幻住菴記芭蕉州

一書小祖翁幻住菴の文を三通あり始
の一通を後柳舎小春宇の一通を賦之流の
一通を猿蓑集より出
石山の奥岩間のうしろふ山
あり國を山とりふそのうみふ
ちの名を傳ふる一
愚考江別栗大新渡田より石山を
舟より行る一里許幻住庵を
そそ侍寺の境内より行る
えん天皇養老五年勅令ふ
ふと建らるる基を造り丈六釈迦
の像を
麓ふ細き流をわたりて

翠微ふ山なり三曲二のふ

一書小翠微ふ山の半腰なり 成美曰
杜牧詩与客携壶上翠微雨後曰山
未及頂上在旁坡陀之處名翠微か
一書ふ八幡の小社あり傍ふ椎の木
あり昔のうやとゆー 一書ふ山の
形の美あり小翠微とりふ
非体なる弥陀の尊像とてや
唯一の家より甚忌むるを
雨初光を和らげ利益の
塵を因一うふふふ
ふ

愚考弥陀を竹灯籠曰性懽尸迦父之

やうにて

五味堂曰松岡法師ある。さう然彼の
うねしはつていふてあゆみなり。き
ふしの言漢 一説ふ奥羽松岡法師の異
き目とてはつていふ松岡法師とては
おはるゝめを筆末のあやうなりと
と云く 愚考松岡法師は五月の初より
象浮は六月の末より何そ松岡象浮
の異き目とてはつていふなりと云や奥羽出
羽象浮北海と一説しふきききき
りのなり又奥羽きききききききききき
拍子ふりふりて久事のききききききき
一説は奥羽ききききききききききき
細きと云きききききききききききき

松岡法師とてはつていふ松岡法師の異き目とてはつていふ

今歳松岡法師の異き目とてはつていふ
昔の松岡法師の異き目とてはつていふ
昔の松岡法師の異き目とてはつていふ
新松岡法師の異き目とてはつていふ
とていふ松岡法師の異き目とてはつていふ
とていふ松岡法師の異き目とてはつていふ
とていふ松岡法師の異き目とてはつていふ

一書ふま本集うきききききききききききき
のいふうきききききききききききき
らむ又山家集うきききききききききききき
とみふうきききききききききききき
らむ 愚考松岡法師の異き目とてはつていふ

そは流るるぬもの草とてこゝろをかりきとせ
て算く入る人々と云くやうなを史及集と
いふ箱の玉といふ箱流るやと云ふはく
まのうらやと云ふぬへー

さやう小春の名残ををううけ
はくー咲のうら山家松よりけ
時を忘るるやうに宿宿うーを
の海のとてやうな木片きのはく

いとしとるうらなとてやうな

一書ふ支考文操西村の歌のうら全文を失す

思ふ久選小宿うーをうら燕うらと
愚考平為春於此の歌ね後小製うの歌
小若をうーと積ふやうなやうな

うらな又曰本はくきうな守屋の美のうらと
るうて太子のはくうらうな寺をはくき
あうゆーと寺はくきとてうらとてうら

魂吳楚東南よをう

一書ふ杜子美岳陽樓小登り待昔聞
洞庭水今上岳陽樓吳楚東南圻
乾坤日夜陳

うらな浦湘洞庭うらな

成美曰山谷詩小惠崇烟雨歸鴈坐

我浦湘洞庭欲喚扁舟飯去故人及

是丹青愚考惠崇うらうのうら

見とてやうなを呼ひてうらな朋友のうら
画るうといふうらうらうらうらうら

南ふ流きさるふ心を飛しおのちん
あをいひまのしを眺守方より引うけ
らまひてゐるわめ

山を未申あそむくら人家
よきふとふ満より南葉峰

よりおち

一書ふ家語ふ曰南風之薰兮可解吾
民之愠兮 愚考熏風復のゆるふと
三才集のるいゆ又呂氏春秋曰東南
の風ゆるふ

心け派を浸して涼し目枝の
山比良の言根より唐傍の松
をうすみあめて深なり橋守
泊よりあつて

木樵のふき

一書ふ山中無事 樵唱 昔時宇の傳と
愚考或りのふ曰木樵の身をも木樵の唄
をりふとさるは此家よりあつて入るるを
あつて樵吏の唄よりと知り
麓より小田ふ早苗とりの歌
能りふ夕園のそふ水郷の
そくくき美系物とくして
あつてといふ事なり中より
之上山を士峰の傳よりよみて
武蔵野のちき 栖もたふ
あつて

愚考三上山とる富士十名の一つふ
して巽松山とる士峰す十名の

ひひりるり致ふたもいさひつゝの根
をきく傳をちりく之上の山の端の雲
法印 寛孝

田上 山よ古人をうそくへてぬ
この嶽を丈の巻袴腰といひ
風をりあり

一書小猿丸太夫 又時長ゆると述せしそ
ありふすむ 成美曰 此名抄ふあなる所の
かゝるをにうといふ所ありそこよ猿丸太夫
の墓あり床の境よりそこの春よ書
のをしれん人皆をまり 一書小猿丸集
因上のさゝふり嶽も忘るめりいふやあ
みのふきあゝぬむ嶽丸集殿
玉律の里をいひくさうあて

細代ありあそとを升らむるま
集の案ありそり

愚案ありありあそとよめり秋万徐及
新撰万をありも文あり久老麻呂美
の云古万よ十四卷 伊賀の上野と
やらねふりいふは傳りより 昔小稱る
りのるもいはいすくえぬなりやその
中入るゆむいどゆり

猿鹿をふるるうむと後の巻
ふ迄のありは松の根伝り葉の
を皮を皮て猿の腰掛と名つく
を味堂曰 旋研松枝架依棚

彼海棠小果をいとする主簿
常小唐を治るる玉翁徐

佳の徒もろあつて

一書小山谷集徐老漁棠巢上王翁
主簿峰庵住ふ云徐佳樂道院^二於
藥肆中^一家有^二海棠數株^一結^二其上時
与客巢^一飲其間又王翁人各^二稱四方
歸結^二屋於主簿^一巢上^二嘗有^一毛人^二至
其間^一問^二道^一愚考主簿^二等^一と考る
非なり主簿^二を官名なり^一同の唐名
あり^二西の廬陵郡よりあり^一木客
と^二いふは^一五品あり^二歌のト^一
白毛を^二常^一より主簿^二といふは^一
の危形小似^二とて^一主簿^二時と
いふなり^一とて^二主簿^一と^二主簿^一と
いふなり^一

唯睡癖山民と成て

一書小海史曰李蒙志睡多を好み
危人と云ずり小食強て皆棋を下す
蒙志を輒枕ふはきて眠ふ^二危^一の數
局終る時一度展轉して云我始て
一局なり公等幾局をとりや
愚考冷齋夜話曰范堯夫小睡眠の詩
あり五雜俎曰睡を嗜む者あり邊老先
杜牧其人数人皆有此癖近世張東海
有睡症記又陸放翁睡癖の詩ありと
まはれをさすといふなり^二なり^一

展教ふ是をあげ出

一書小展教山の言き教之 芸山曰
王子端詩小門前利啄定佳客簪外

孺翁詩好山 一書小東坡按家安晨
報

空山小風を叩て看す

一書小石林詩話曰青山扣風坐黃鳥
棲書眠是山居閑寂のさるるなり

一書小玉荊公詩扣門對青山棲書
眠北園

そとより心あめるる時を空

の澄み空を汲てみたり

炊くときしりの米を俵て

一炉の煙いときなり
一書小西軒上人ときしと外に
岩の苔落ぬる年ふすなともなき
するるなり

或美曰山家集家集小

ふんえん或曰小堀宗甫の歌り

そとむり住む人の残み

はるく住む人なりとあり

是るりのすきなりとあり

るを満て夜のものをさむ

るはとこるるといさこのを

はるくをを筑紫宗甫の山

の僧正が加茂の甲斐あり

教子までさるる活ふのあり

いふそりるるをあらんを

て額をとといとやすしと筆

をそめて初住居の三字を送

らり歌て字居の記念とあり

一書に加茂の甲斐あり

とあり

加茂初安

後本甲斐なる敦虫と号す曼安寛
永の間の能書なり 歳子未詳
稱してりりや 愚考李太白待大
是又康之歳父云く又歳君とも云
歳よりイワクニあり

とる夢て山岳とつゝの歳康と
云々る器多しとて一とるなり
本曾の核多し越の若葉斗
枕の上の柱ふりけりりるを稱
しとてふふふ心を動し
けりる宮中の氣里のそとの共
入るてゐるのそとの袖ふり
しとてふふふをさし
来りてふふの歳後日院ふ山

の場ふりてふふ

一書小雲谷雅詠来晦庵野人載酒
来農終日已夕 右古文 希集より
夜坐静小月を待つて
を待てり灯を点てて月西ふ
是非をさし

一書小夜坐不厭湖上月 一書小莊子
新物海曰周西同来曰曩子行今子止
曩子坐今子起 莊子曰義曰周西
彩邊之終落者此時是非待彼之
喻也

のくいのいといとてわくわくふ
閑
歳をぬみ山勢ふ跡をさ
くさむといとてわくわく

病身人小倦て世をいとも
し人小似たり情年月の
うはりちりし身の小を
おりしりし時を仕友を命
の能をうらやみ

一書小翁を後堂家同苗仁古東門左の家
辰杉尾基七郎と云後従の小翁を基八
官をなうらやみしりし一なりし
一この佛新祖室の庭小入
らむとせしりしりしりしり
一書小翁を後堂家同苗仁古東門左の家
辰杉尾基七郎と云後従の小翁を基八
官をなうらやみしりし一なりし
一この佛新祖室の庭小入
らむとせしりしりしりしり
一書小翁を後堂家同苗仁古東門左の家
辰杉尾基七郎と云後従の小翁を基八
官をなうらやみしりし一なりし
一この佛新祖室の庭小入
らむとせしりしりしりしり

意味堂曰惠能祥所若三十而究佛
新祖室 一書小曰佛頂祥所小冬
して採りしりしりしりしり
一書小翁を後堂家同苗仁古東門左の家
辰杉尾基七郎と云後従の小翁を基八
官をなうらやみしりし一なりし
一この佛新祖室の庭小入
らむとせしりしりしりしり

一書小翁を後堂家同苗仁古東門左の家
辰杉尾基七郎と云後従の小翁を基八
官をなうらやみしりし一なりし
一この佛新祖室の庭小入
らむとせしりしりしりしり
一書小翁を後堂家同苗仁古東門左の家
辰杉尾基七郎と云後従の小翁を基八
官をなうらやみしりし一なりし
一この佛新祖室の庭小入
らむとせしりしりしりしり

くもさなり 一書ふまの白賜杜甫
飯顆山頭逢杜甫頭戴笠子日卓
牛為同緣何太瘦生只為從前
待苦

賢愚文雙のふとーうさる
おのれささか幻の栖るーんや

とありふれりてーうめ
一書ふ海後注曰謂之尚忠尚尚
雙因尚上

ささかのむ根の本も者さまま
一書ふ源氏推り本の巻ふいりる本の
しとささかのむ一くちむとさ
ていー人さあけりるささーさ
さささささささささささささ

てふとけのさささささささ
おこるいさささささささ
さささささささささささ
いささささささささささ
さささささささささささ
うけさささささささささ
とこふさささささささ
ささささささささささ
のふとささささささ
改の推をさささささ
非ささささ

たのさささささささ
さささささささささ
さささささささささ
さささささささささ

あつたといふと無つてなり又小説小田鄭
慶好書若無紙で慈悲寺樹の葉を
彫へて是ふ書で樂しむ傍より他
つり愚考家隆卿云の葉を著の
る多ふし書はげつたふみくまうまの
やふゆゑうまをよはげやう

歌や葎の中の花うつき

愚考白氏文集葎室中有美人常
織絹繡繡於市又字苑ふ日歌官る
のるるりカホバセト訓す

あつてし一書ふ下歌うぬ月寄

愚考源氏よりあつてし一タトルなり

句人言曰蹴躡るなり字彙曰緩歩の形なり

膳亦未や早苗のうけふ文彦

愚考山王公礼の供御を申すゆゑ小膳不
淡といふセシヨの切つを意をせ、とよこるなりや
一ふくろのそやき御田のそと一を

愚考之を大坂の人山城のそ御田の
麦粉を土産とすりのうま土産を我
玉の産物をとるす一を今集
よはの玉のるふいおをるん山城の
とらふらひるむるのひあそはの
玉をとりもるををりもる山城のそ
り、麦粉をとりもる、はとるなり
賞ゆてとらふらひるむと心のそ
の御膳は新よりをせそおのひやう小盛
なり

一な入山さけりりや旅屋をき

愚考新氏要覽曰俗家四月の寺
を以て結玄と一安寂九十月七月
屋を以て解玄とす又るたこの旅
床すきも九十月れるる山小養うて
おとすむと書音ふやうへー

女立や接の奥の一とす

愚考力サる良香なり馨と書一
あうもあうと一うて法をあるを馨と云

明季疎生初日唐

去るやあも早に戸のいつ

愚考住持てと一の宿をまて思連
ハをむーありきと一はまはくは
年深の宿此の冬四年のころる
たのいにはふふとつけととと

猿蓑者芭蕉翁滑誓之首

韻也

愚考史記滑稽傳考物云滑稽酒器
也言出口成章詞不窮竭若滑稽之
吐酒也さきさき滑稽妙なるの誓
そとるなり

成美曰韻字彙与響

同也字典云唐堯神人暢有韻在

聖勅中為宮在亥中愚考猿蓑

の一句も六窓一猿の名吟と首韻

し書も非なり首韻也

非比彼山寺偷衣朝市頂

符笑只任心感物字興
而已矣

一書小漢室狙戴鵲符笑朝市金
圈狙偷衣感荒徒ふの外猿の説
しやちしやちして記す小足らに

洛下逸人凡兆去來隨

翁遊字棋鼓竹窓蹤等

凌節斯有歲屬撰此集

玩弄無己自謂絶起狐

腋白裘者也

愚考孟嘗君の持ふの狐腋の白裘
直千金なりて天下を致するなり是を
幸娘ふらして秦の囚を逃れし
の各求裘るなり王褒曰千金の裘

一狐之腋より得るは狙狐の猿義に

各求裘より絶起するなり或人發して

云天下を致すの白裘小勝ふなりとハ

妙の言て曰千疋の狐を殺して一人の

を乞ふを乞ふは乞ふ各圖りて宝とて

すふふとて乞ふは乞ふを乞ふとて人間の

兩具を乞ふて獲ふを乞ふとて仁情の

目の端より乞ふとて又を裘ふ裘

を乞ふとて乞ふとて乞ふとて乞ふとて

乞ふとて乞ふとて乞ふとて乞ふとて

乞ふとて乞ふとて乞ふとて乞ふとて

乞ふとて乞ふとて乞ふとて乞ふとて

乞ふとて乞ふとて乞ふとて乞ふとて

乞ふとて乞ふとて乞ふとて乞ふとて

乞ふとて乞ふとて乞ふとて乞ふとて

秋海の思ふに於て歌号五義の蘊奥なるを知らざる

維新元禄四稔辛未仲夏余掛

錫於洛陽旅亭偶會北來吟席

見需記此支題眉尾卒援毫不

揣拙庶幾一蓑高張有補于詞

海漁人云

愚考維字彙曰凡策書の年月必維字を以發之

敗る之時の吉字あり稔る穀一熟の義小

老と眉尾る書尾るの王元之曰大張一

網羅群英

西華山人の自序
八十八年

又本堂公

日新

一書は曰く雨くくや音の如く降て時く日の降りぬて
柳の葉は降きハハ九層もそよ雨の降ん地を何となく
曲のすれさるくはらる或は傳のまうて柳のハハ九層も
そよ雨く 諸人の常としてハハ九層も中を並れりといふ
一書は云柳の葉は風はすのひささるあつさるハハ九層も
そよ雨の降るやうそよのえぬり

一書は云はる家々の説教もあれも悪く用ひる一書は
の降るを歩起しそよ雨くハハ九層の降るて上りて
さきと九層といふ雨さきより降るの柳の降るさき
ハハ九層もそよ雨くハハ九層も中を並れりといふ

一書は云はるハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も
中を並れりといふ一書は云はるハハ九層の降るやう
そよ雨くハハ九層も中を並れりといふ一書は云はる
ハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も中を並れり
といふ

一書は云はるハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も
中を並れりといふ一書は云はるハハ九層の降るやう
そよ雨くハハ九層も中を並れりといふ一書は云はる
ハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も中を並れり
といふ

一書は云はるハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も
中を並れりといふ一書は云はるハハ九層の降るやう
そよ雨くハハ九層も中を並れりといふ一書は云はる
ハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も中を並れり
といふ

一書は云はるハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も
中を並れりといふ一書は云はるハハ九層の降るやう
そよ雨くハハ九層も中を並れりといふ一書は云はる
ハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も中を並れり
といふ

一書は云はるハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も
中を並れりといふ一書は云はるハハ九層の降るやう
そよ雨くハハ九層も中を並れりといふ一書は云はる
ハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も中を並れり
といふ

一書は云はるハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も
中を並れりといふ一書は云はるハハ九層の降るやう
そよ雨くハハ九層も中を並れりといふ一書は云はる
ハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も中を並れり
といふ

一書は云はるハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も
中を並れりといふ一書は云はるハハ九層の降るやう
そよ雨くハハ九層も中を並れりといふ一書は云はる
ハハ九層の降るやうそよ雨くハハ九層も中を並れり
といふ

一書云云草拈香眼疾と云る風情なりと蓋朝花集一
兩章云々云々斧鑿の痕と見す

削やうと云り坂の今此風

一書云云京屋谷と兼谷との間に坂あり又廣原の
西の方ともありと云う考へ

作約をきく綿取の雨

うき藤と贈とつれなげり

一書云云人喬入のともは藤と女童の風情と云る
つさ

柳の情一門とたぐり

百妙と云う世にも長閑さ

一書云云五柳子り柳と云うと越と食めりや

猿蓑よりれり栗の松家

日ハ草と云うと柳と云う

一書云云己の名の前集と云うと此集と云うと

らむと夢詩と柳を云うと越と食めりや

の猿より藤と云うとけあやかけ金と云うと

らの猿と云うと自體と云うと出せと云うと

一書云云後集師の雜談集と

二書云云と云うと云うと云うと云うと

猿と云うと云うと云うと云うと

の云うと云う

三草紙と云う伊賀の連気流の生國と云うと

神念と云うと云うと云うと云うと

猿白も猿と云うと云うと云うと云うと

一書云云大坂と云うと云うと云うと云うと

と云うと云うと云うと云うと云うと

諸神をよむと云くは、服の白もあつて、
不審之と云く是より、其の減は、
るをちりて、書に、今新編減存を、
とて集て、よて七部の別とて、
教号なり、といふと社巻なり、
左の體、すなはち、とて、
分改補の基、とて、とて、
と入て七部、とて、
れ、とて、
として、
序、曰

赤信、とて、
山、とて、

漢、とて、
世、の、
山、堂、

け、山、伏、の、
國、の、
切、
經、
勝、と、

大、切、
暮、の、
後、

雪、
中、の、
流、

一、書、
と、
と、

一、書、
と、
と、

か、
押、
合、

け、
花、
の、

と、
と、
と、

小腹綿ニ光をやとせ玉精

愚言う小彼條ハ粟門なむとの是々つき十條ノ
似る暇衣之考うとハ則光明なり保陀の光昭ハ十二
光明ニ刻按る小捨の之久安百首玉枝光式みく
君代は百かり嘆うむけの花

振おりりや廣也の麻の角

愚考准南子曰陽之至是以春則群獸除角

え月や衣深き衣のく表

愚考待曰東方未明顛倒衣裳顛之倒之自公名之
又木葉ニさり海ニある衣をいそぎはく君
はつかうの衣をいそぎはくは前の衣をいそぎはく

人も足ぬきや鏡の裏に梅

一書云伊勢物語一月やあぬ春やむうはる
なぬ衣をいそぎはくは前の衣をいそぎはく

梅のは春結又は自ひて後の衣をいそぎはく

ある衣をいそぎはくは前の衣をいそぎはく

一書云鏡の宿の梅は白と見えるはるはるはる

乃使て足ぬる人もある平竟鏡はうは梅の衣

をいそぎはくは前の衣をいそぎはく世の人の鏡乃面は足ぬ

さる衣をいそぎはくは前の衣をいそぎはく

一書云深山はみ雪降る難は人ハ風をある

香葉竹ハかは難は鏡のうは引えて鏡の

うは引えて鏡の

いふ人も新しき強しかるべくは惜め
むとあき角のなとを比しその吟之中略

後の表の挿板のものハ源信明家集のもとの
かみと後みその介りもその之中に倅然と某
尔後の表は梅の形を铸つけて作りこれハ奇ふふとや
ともたつといひむううまむ田舎のうづをえんう
る今後明より又けきを本拠とせしれいあゝ海と
もけきよ叶てるといひつる——後表の絵を見て思ひ
やり——さうしたものは梅の花後とて古物に入事な梅花
の形であるものとして後明よりする古物にもいふの有と云
一書は云墨梅の詩は瘦損昭陽鏡裏春と云く
一書は曰さうくの説ありとて其等にて極高なる地
りふハ易は艮其背不獲其身行其庭不見其人無咎と
いつらぬ近思錄存養類程子曰人の其心

も則人の脊はあゝ脊ハ立腰もともゝ立ちたすれハ但ぞ
吐いゝかも思慮なくしてともはたてりある其
脊は長るゝや又るものすめつけて色男なきる
をわゝゝと蓋け古徳ゝ求むる一章ふあゝ
鏡の面ゝうつるもの作も又ゝ又れもそれと
附ゝのハ是中可致あゝと

去時堂云屈原楚辭難強云曰世人不知楚懷王以客入盤佳
強師いもの圃境の〜〜〜軍兵〜〜〜と傍〜いもの水〜

玉華集

月をぬきしもまゝの姿をもすむとて月の影をまづ
照る處乃かのうららかに嬉しく君

一書より白陰ありて之をのぼるは、灯をのぼるに似たり。あはれす。ふ
重なりつて去来う。湖東問答よりけり。あはれ。あはれ。あはれ。

五元集拾遺より其の部より入る部へ今其の部より
出ると改む

湖東の國を去るに角、時を暮れしむ。所姫君
は備前より一里の大年の松大黒松の下に坐す
灯——是と姫君といふ人なり也。嫁りて後
きも灯明か——此は大年の夜元朝なる龍乃
事と姫君といふ人も世に伝へたり。姫君は
喜喜しく龍乃事とて舞ひけり。

要考其角を將に龍の一向頭より見て世は、
天の雲霧と一帯の事とを指す如く從て之を見て、
遠近大眼の杯も此杯なるも皆子生あるべしといふ
節且て用ひたまふ、是れ新年の祝意を籠めて下りて
なごう姪と若しといふと端々之感直におこるゝや
かゝるに其角の情勢と少腹の如きものあり

程の成に法要の一徳院と、ある。その所収
 一、十巻と云ふ一、其角の邊に、西行集と
 云ふ。且の題に、入行大華の巻と云ふ。其
 巻の、入行大華と云ふは、西行集と
 なる。其、題に、入行大華と云ふは、西行集と

標の世阿弥を音か
 考世阿弥を親世を以て二代目と
 するものゝ所を大和國結城に傳
 へて座の一人として親世親阿弥は東山殿の時時礼
 舞の祖と二代目世阿弥と三代の名を合
 親世座とす

神皇正統記卷八 白岩校乃白比丘尼
云云云本朝列仙傳云白岩校の國は白比丘尼といふ
ものなる其父山中より仙へて來り仙人といふ

楚の一字といふて、歎く。何ぞと云ふ。あむくそのこと
まゝの中程に色しり例の海船集は入るより今は
其集と侮むるハなれぬの麻忽おられハこそあつて
形つ西楚とおへ故変にも古傳にも及んず。而も
名と載入の能くすべし。

余味堂と常居集を文は行思をも書の竹子教ふべきと

唱へしや

まゝとて、
多しきなり
蟬の聲

勇考陸雲、蟬の賦、蟬有五德、頭上有縷文也、含
 氣飲露清也、黍稷不享、庶也不巢、姑儉也、應候鳴
 信也、きりとあてハ信之速、云ハ儉なりむ、土用を
 候て、唱去用受て止ハ信出なり

交應も形心内此いりし

愚考後漢書曰
楚王細腰を好むと云ふの言はれも

のもありとてや先主を病むるあり是あ
 りともあまひ合ふれそあつては是あ
 万葉集曰吾妹腰細く須軽原子之其姿之端正
 殺合臣
 自亂
 唯南子曰美玉
 好細腰而民有
 美玉之好

志々々々々々々々

東洋堂云心蔭中風を拂ふとて百病の瘡となりて曲宴さ
うけ雛子と寝るを爲す事となはしやいふにこれハ臨終
法なきゆゑなりと云ふの建礼をりてを平一上方こそ
心蔭の吸おとらんとて如守む川村の今こ

次郎や道子けりや
西のわ

愚考新田義貞相片の軍勢は曰為人世に迷ふ方
角と失つ時海原の事に向ひきる方とあつて一人
をわづむくまされハ深澤と便に西路とありて
なまは一處よりつきて又ハあつては
ふりてハぬの路ハ作せしむ

算

愚考主解云陶明の作のみ——云々桑白の
を味あり——是ハ彼陶明う五六月中北窓下臥遇
涼風暫至自謂羲皇上人——とて——云々
たり山谷の卧陶軒の傍に陶公自題卧宇宙一北窓
又笑花類纂に曰采菊東籬下悠然見南山其影

為月二日の坪乃ら

悪者新古今秋の事て月の桂の^まみやをみるいり
を花とちりちりりよき月よ花あつとて
と母まういと花とちりちりちりまをみるいり

とく小荷の事を書るなり光りを花とちりてあ
けハ棉の白くくく又ゆきを花とくくかひる白く

あぐの根をむ 月又外

くつゝもろかへさるゝ若し進ひいひさへても寄ひのゝも
くつゝもろかへさるゝ若し進ひいひさへても寄ひのゝも
の宿ふしきききき

あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外

馬骨乃すゝゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外

あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外

あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外

あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外

あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外

あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外

あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外

あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外

あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外
あゝ花江ひぬ馬骨乃すゝゝ外

1. 天竺の地味は、
2. 天竺の地味は、
3. 天竺の地味は、
4. 天竺の地味は、
5. 天竺の地味は、
6. 天竺の地味は、
7. 天竺の地味は、
8. 天竺の地味は、
9. 天竺の地味は、
10. 天竺の地味は、

1. 天竺の地味は、
2. 天竺の地味は、
3. 天竺の地味は、
4. 天竺の地味は、
5. 天竺の地味は、
6. 天竺の地味は、
7. 天竺の地味は、
8. 天竺の地味は、
9. 天竺の地味は、
10. 天竺の地味は、

1. 天竺の地味は、
2. 天竺の地味は、
3. 天竺の地味は、
4. 天竺の地味は、
5. 天竺の地味は、
6. 天竺の地味は、
7. 天竺の地味は、
8. 天竺の地味は、
9. 天竺の地味は、
10. 天竺の地味は、

1. 天竺の地味は、
2. 天竺の地味は、
3. 天竺の地味は、
4. 天竺の地味は、
5. 天竺の地味は、
6. 天竺の地味は、
7. 天竺の地味は、
8. 天竺の地味は、
9. 天竺の地味は、
10. 天竺の地味は、

[illegible][illegible]

我旨願述將去世通彼果土願氣く愛得我
所去のきりて古郷まかふるををなくさる
ア〜〜草をハ氣もく〜〜〜〜〜〜〜〜〜
く〜〜ハま凌矢内御骨願氣を氣り愛答や
あり

臨書や浮世をとり終極なり

あ将えあ上人臨書山うき世をとり〜〜〜
〜〜〜のよなり申〜〜〜〜〜〜〜〜〜
乃〜〜あるものり傳るりと祝〜〜〜の

又春の庭ひ〜〜〜けハ新〜〜〜
馬者西り上人二兄よを〜〜〜〜〜
て永奇を依〜〜〜〜〜の情あり〜〜
極々集る情や極々小豆粥

相俊云太平清覧曰く自今より作清粥以和門戸
又事又類聚も曰く別里風俗正月望日祭門先以楊柳
挿門陸楊柳枝新指仍以酒脯飲食及豆粥挿箸
而祭之又拾芥抄曰正月十五日亥時煮小豆粥為天狗
祭夜中東上則其粥凝時向東方再拜長跪服之終年無
疫氣一掃也〜〜〜〜〜ハ白毫ハ〜〜〜
云事根原曰寛平年中ハ始て煮る

煮りて食ふを煮るの〜〜〜する付あり

け白のみふを煮〜〜〜と信書ありをやり飯さる板
柳のきりるの節も無〜〜一應ハハゆ〜〜〜
〜〜〜の煮る煮る〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜の煮る煮る〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜の煮る煮る〜〜〜〜〜〜〜
先煮る煮りて飯堀ハ〜〜〜の風流を煮る

信濃何九撰釋

序文の始末

子明曰可更來長房具謂長房翁乃與俱入
 壺中唯見玉堂嚴麗又藻志々藻々水座の
 芳るる志の涼きをいへるる又え鶴の酒
 ふ壺中天比乾坤外あの意を摘て書
 するく江南此歌頌るに歌の人は是を
 則りて歌号をひきこと々字より

本のりとお汁も。後と極うま
一書よ花山院に製し本此トをすみうと
す是ハ杞のほろろ者なり。ハハ、多りよその
うぬ、一書よ西上人のオハリと旅集を
そよまより。花山のうす方をきずる甚地
柳田曰古今集よ佐人のわけてまより本の

いとをねむけりて、おぼしきものなり。愚者、
口を閉て、人の心よりしるす。

月待て、飯の肉、裏の目、
粗、細、はく、粗、おとやわさ。

一書、飯の肉、裏より附く、大嘗會の時、
悠紀主記、稻をばく、叔、叔、あり、そと、献、
杣丹後國より、悠紀主記の稻の、手
載集、小雲田の里、此稻を、おそ、はけ、と
あり、愚考、日本紀、廿九卷曰、天武天皇
五年九月丙戌、神友奏曰、新嘗十國郡
也、齊、則、尾張國山田、於、次、丹波國河沙、
並、食、と、云、新嘗、祭、用、明、帝、一、年、初、稻、を
井、上、供、す、是、則、新嘗、之、悠紀主記、の、謬、字
也、十載集、小大嘗會、主記、方、稻、春、秋、丹波

國、山田を、より、刑部卿、能、美、お、め、は、ち、の
きて、め、と、云、ぬ、代、る、是、と、雲田、此、村、の、稻、を
お、そ、は、け

名、を、さ、り、し、小、降、り、なり、
愚考、美雨村、五月、五、日、立、秋、の、雨、と、さ

よ、し、小、降、り、なり、て、此、日、時、氣、の、移、り、なり、
法、小、曰、同、季、を、立、る、去、中、小、他、の、季、を、け
是、と、云、る、去、と、云、る、鞍、け、り、より、袖、を、
衣、の、り、小、他、の、季、を、
さ、是、と、云、る、時、氣、
別、と、此、秋、又、か、り、
予、部、よ、む、花、の、盛、の、一、方、
愚考、予、初、を、聖武帝、天、平、二、十、年、七、月、
法、華、寺、初、を、始、て、行、ひ、り、さ、る、田、原、お、い、て

愚者以故可

附錄

双亡の目を肥くちて暮らる

大節曰杭孝紙入きよりけりるものこの双
六を日置といふなりけるやあつぬいふや
りきとくあひふ火をありくうけてつ
くきのさいをさひりてとくうとい
ふはねえ 愚考名物古帖ふ曰舊双亭
ふ曰西公より始り曹魏より流行し日本
双陸宋洪遵譜双云白木爲盤濶可尺
斗長尺五寸厚三寸刻其中央爲路置二
轂子於竹筒中撼而擲法盤上祝其
米以行するを女中五枚子供る先歸
一を老者爲勝僑人甚な之兩人對局自
朝至暮不已僕親を亦移日不去ふの

る嶺岨より狭く石さく本根をいへり牛
る食物の通り一きみなり 腰本搦峠と
りよとこや

杖のいり宮ものそくをいひたり
一書より大塚まゐるもの付るなりとまゐ

ふしとくしとくまゐるなりとく

唐野の里此 大ふたとまゐる

愚考飛山よりいふまの所ありといふしとくめ
むくしとくまゐるなりとく 飛山よりいふまの所ありといふしとくめ
て唐野よりいふまの所ありといふしとくめ
破の中を刻て見ゆなりとく 破の中を刻て見ゆなりとく
たこりなりとく 破の中を刻て見ゆなりとく
又まゐるなりとく 破の中を刻て見ゆなりとく

るに勝り次よりふ前より見ゆなりとく
けり等一の唐野よりいふまの所ありといふしとくめ

唐野の里此 大ふたとまゐる

成美曰ふ波の海上よりいふまの所ありといふしとくめ
とくしとくまゐるなりとく 成美曰ふ波の海上よりいふまの所ありといふしとくめ
さ目よりいふまの所ありといふしとくめ
のりて波よりいふまの所ありといふしとくめ
り波の所よりいふまの所ありといふしとくめ

遠よりいふまの所ありといふしとくめ

行の魚よりいふまの所ありといふしとくめ

志きよりいふまの所ありといふしとくめ

愚考世に飛山よりいふまの所ありといふしとくめ
一物よりいふまの所ありといふしとくめ
のり波よりいふまの所ありといふしとくめ

ありありとくひに言ひて曰此度不
良ありて若うありと法人は言ひ
むむ人龜を吳王に獻るかと欲して
まてりま夜戴里といふ岸に船を停る
て泊るまに夜中、龜を呼て
云旁ちるうゑ元統のや龜云我
將紫をとりて將に烹るべし
何ぞと問ふに吳王は南山北薪を
我を烹るべしと云ふに樹の云吳王は法
尊元遜あり必き我を烹るべしと云
烹る龜の云多くりのゆゑなりと
及む樹則點す吳王に至て王は獻す孫
命して乞と烹さし薪万車を焼とい
へり

世に忽解むと獻する人の曰龜と樹と同
善せしむを説る則彼樹を伐りて烹る
は立所不解ると云ふは、綱の門吉六綱
の根烹らるゝ何のゆゑに死にてハ
ト龜の龜河に死にてハ意にハるゝ是牛糞の
賜不應に又此意を東坡の坐右の銘に曰
坐中談笑慎桑龜牛糞ハ龜の裏句く

百姓の木棉志を以て

愚考博物志に曰十一月十二月甲子を裁く
木の末とすすは木の末棉志を以て
木の末とすすは木の末棉志を以て
毒氣を憚るゝ木の末

小糸を以て木の末の繩

ある哉新よりしてなる書は笑の心魂をふりて
あふよりてまゑ三太郎とあり 一書は田舎
よりて苗代の呪ふ角大師の礼を仔細にと
とまひてまゑあり 左に西我伝流りてま
苗代の呪ふ蛙のふりてを串みとしてま
ま 愚案宜るるる 我よりあるふ角大師
舟出の蛙のひかしく形
世々をとりてまゑあり 供の侍
るふ舟にるるる 供の侍
須テをとりて物不自由るる基不
愚考は源氏須テの巻の巻の上のあまよふ
て須テ一丘迄の行るるまゑの上を格別のあま
より世々の詞ふ一とどまりはあまよふまゑ
るるる 供の侍の巻のひき下のみあり

まのりてまゑあり 一書は源氏須テの巻の巻の上のあまよふ
の上のあまよふ三太郎の行るる

狐のおそろき 子 あり 一書は

愚考は源氏須テの巻の巻の上のあまよふ
須テの因裏の時狐の巻を製衣をくらまむとして
白狐をとりてまゑあり 紀列雄の山の関る山
に須テの方へ子とて供ふよりまゑあり 一夜山に
の家より狐の来て曰く須テの物狐の裁衣
よふる事をなげきくらまむとしてまゑあり
よりてり 一書は源氏須テの巻の巻の上のあまよふ
思ひてまゑあり 一書は源氏須テの巻の巻の上のあまよふ
より山に奇異のありふるをとり 彼我家より
ふ所のふるまゑあり 一書は源氏須テの巻の巻の上のあまよふ

生を止むとするは其種々の怪談ありき
とも夫を言ふといふ此の事なるは不用なり
歟を狐といふ事日本に異記ある或狐女
に化して或人の妻を成て子をもうくも後
家の犬より遠く踏らば身を食はるなり
去て二度あるといふ此の事と名付
たりといふ夫より一首の歌ありて哀しや
戸をたらしぬ玉煙をひそく見えてい
し子ゆゑに來つと來つと來つと來つと
此謂ひや
しら花より雪詠引する言ありて
小冊の言陽よりゆりけり
愚者雪詠を私事始ふ云手利休茶を
の付録次へのお雪をいとして茶後の裏

牛の皮をけりてくきりて此所を天正十六年
大岡秀吉公北野おれめ大茶湯を催したる
百間の長屋を建て大小名を勿論大合を
おとされりて雪詠北野の馬場を附て
二日の間小茶湯を拵せり
神社老曰北野天神者右大臣道實公之靈
也昌泰四年正月二十日左近筑紫延喜三年
二月廿五日薨于配所葬于安樂寺天慶三年
菅靈託七条坊婢女寂子欲接右近馬場天
曆元稜立祠于北野正暦四年五月遣勅使於
率府安樂寺詔贈大政大臣正一位
○龜の鳴るる故事を今泉為家卿。○○○
川添みづのたれを何とてしけり海の
るるらむき

何月有光
柳志

[illegible]

